

## 日本の新聞紙に見る「李香蘭」のイメージ ——朝日新聞と読売新聞をめぐって

### The Image of “Li xianglan” in the Japanese Newspaper:Focusing on the Newspapers of Asahi and Yomiuri

◎呂 艶宏<sup>1</sup>  
Yanhong LV

<sup>1</sup> 龍谷大学 社会学研究科 Faculty of Sociology,Ryukoku University

**要旨**…日本占領下の「満州」時期において、山口淑子が国策会社満州映画協会（略称「満映」）の専属女優になり、芸名「李香蘭」としてデビューした。神出鬼没かつ正体不明の印象が強い李香蘭は日中においても人気を博し、言語／国籍／民族を超える「国際女優李香蘭」の存在もあるようになった。しかし、日本の活字メディアはどういうふうな、中国の娘として「李香蘭」を日本国内に売り出されたのか、これまで言及されてこなかった。本稿は全国紙朝日新聞と読売新聞の関連報道を量的かつ質的内容比較分析によって、李香蘭の国籍に対する報道姿勢を明確にし、新聞紙に見る「李香蘭」のイメージで持つ意味を追求する。

**キーワード** 「李香蘭」、日本の新聞紙、ステレオタイプ、国籍の「謎」、世論操作

#### 1. はじめに

日本人にして中国人を装うという李香蘭は満州映画会社が生んだ最大の女優である。<sup>1</sup>彼女の本名は山口淑子であり、1920年中国遼寧省瀋陽市で生まれた。13歳の時、父親山口文雄の義兄弟で李際春の養女となり、「李香蘭」と名づけられた。1938年関東軍陸軍少佐山家亨の推薦で、山口淑子は「満映」の契約女優となり、「李香蘭」という名前がスクリーンに出るようになった。彼女は満洲娘から北京娘、台湾娘まで、日本の植民地の女性を次々と演じたので、「李香蘭は日本人ではなく中国人の女優である」とほとんどの人々は信じていた。このことが他の植民地下の女優、芸術家とは異なる点である。<sup>2</sup>戦争が終わった後、李香蘭が上海で国民党政府の漢奸裁判にかけられたが、日本人と判明した後、釈放された。その後李香蘭は本名山口淑子に戻り、女優、テレビ番組の司会者と政治家を歴任し、映画界と政治界で活躍した。彼女の自伝『李香蘭 私の半生』が1980年代出版された以後、大ヒットになった。これに基づき、様々な書籍、映画、テレビドラマが作られていた。李香蘭（山口淑子 1920-）への関心は依然高い一方、自伝の中での不明瞭な点が多い。

特に、従来の研究には、李香蘭の国籍に関わる身分問題やその意味を徹底的になされていなかった。その故、彼女に関しては「超国籍論」「二つの祖国論」が見られるようになった。映画学者佐藤忠男は当時のメディアが今のように発達していないので李香蘭の国籍の「謎」が解明されていなかったと指摘した。<sup>3</sup>実際、既存研究によると、「満州国」政界と財界要人と日本軍宣撫官が支持される李香蘭の国籍は政治、外交にかかわる問題と言える。<sup>4</sup>さらには、戦時日本のメディアが国民を戦争に動員する役割を果たしたこともわかる。<sup>5</sup>

本稿の目的は、「満映」スター李香蘭としての関連報道を検証することを通し、李香蘭の国籍の問題に日本の活字メディア

<sup>1</sup> 山口猛「満州で作られたスター」『哀愁の満州映画- 満州国に咲いた活動屋たちの世界』三天本房、2000年、53頁。

<sup>2</sup> 前掲書、山口猛、49頁。

<sup>3</sup> 山口淑子・藤原作弥『李香蘭 私の半生』新潮社、1987年、440頁。

<sup>4</sup> 拙稿「李香蘭の国籍の『謎』と『満映』の宣伝戦略」『龍谷大学社会学部紀要』、2011年、第39号、32-42頁。

<sup>5</sup> 山本武利責任編集「メディアのなかの『帝国』」岩波書店、2006年；及び（シンガポール）卓南生『日本のアジア報道とアジア外交』世界知識出版社、2008年。ほか。

がどういう形で関わったのかを明らかにする。そして、当時の興味深い社会背景を通して、「他者」として「李香蘭」のイメージがどのような意味を示すのかを提示したい。

朝日新聞と読売新聞はいずれも販売部数が多い全国紙であり、李香蘭に関する報道姿勢にも鮮明な違いがあるから、二紙に限定した。

## 2. 李香蘭に関する情報の状況<sup>6</sup>（「満映」時期に限定1937-1944年）

### (1) 李香蘭に関する情報の種類と量

項目	記事	評論	読者投稿	広告	計
「朝日新聞」	13 (ラジオ1)	2	1	3	19
「読売新聞」	42 (ラジオ7)	0	1	91	134
計	55	2	1	94	153

単位：篇

図1. 統計表

朝日新聞と読売新聞が李香蘭にある程度の関心を払ったことが伺える。図1によると広告は61.44%を占め、ほぼ映画会社、レコード会社と劇場の広告である。記事は35.95%を占めた。二紙の新聞の共通点は決まっているコラムとしてのラジオ新聞である。記事の中の13.8%を占めた。さらに、朝日新聞の「巷之声」と読売新聞の「読者眼」は読者の投稿欄としてたまにある。朝日新聞の関連記事は少ないが、二編の新京と上海からの特電および二編の匿名評論が掲載されていた。一方、読売新聞が記事を重視したことがわかる。

### (2) 年代別にみる李香蘭に関する情報の総量

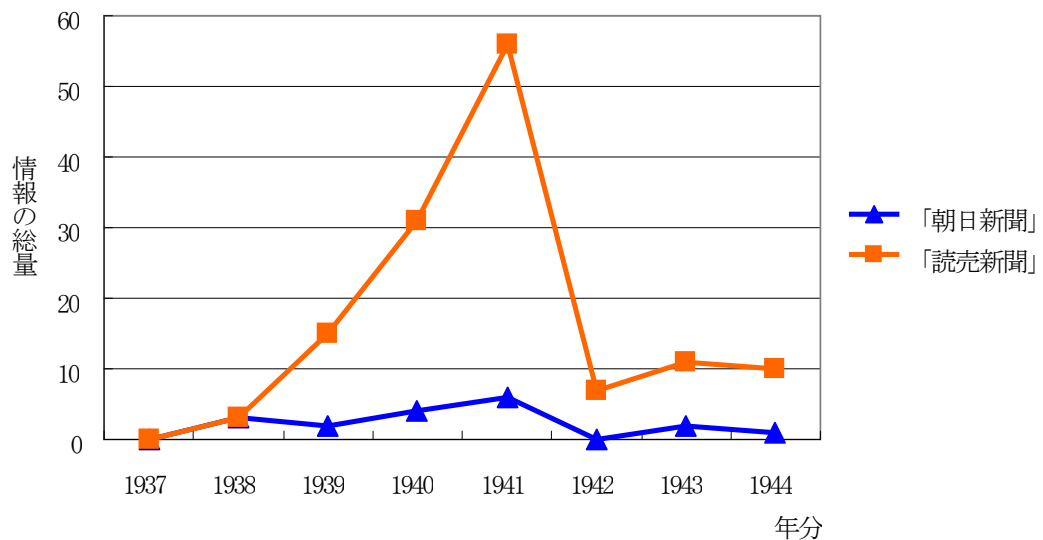


図2. 「李香蘭」に関する情報の推移

二紙の新聞が李香蘭のイメージの関連性を解明するために、二紙の新聞の各年度の情報量を統計する結果は図2のように示した。1937年から1944年まで大きな変化が見える。李香蘭にかんする情報量が一番多い時点は1941年である。ここで注意すべ

<sup>6</sup> ヨミダス歴史館と朝日新聞蔵のデータベースを利用し、量的な調査を行った。

きなのは、1941年の2月11日に日本の紀元節で、李香蘭の実演が「日劇七回り半事件」<sup>7</sup>を引き起こした。その結果として、十万人の観客の雑沓事件にたいして警察官が出勤して消火用のホースを持ち出した事態に陥った。この事件によって、当事者として李香蘭に対する国籍問題が報道されるようになった。

### 3. 新聞が作った「李香蘭」のイメージ

#### (1) 北京に生まれた「満洲スター」

1937年から1941年まで李香蘭の人気と新聞二紙における「李香蘭」のイメージとの関連性を明らかにする。二紙が「新人李香蘭」を意識的に作り上げることが分かる。朝日新聞の報道の中に李香蘭をほめる言葉は紙面に溢れている。例えば、「満洲国麗人」「満映の美少女スター」など。読売新聞が「前進満洲の満洲スター李香蘭」、そして「満洲スター」を強調するために李香蘭の写真の下に「前進満洲の日本スター——星玲子」の情報を載せた。さらに、読売新聞は「心強い日本生地の進出結婚すると威張る満洲の娘/李香蘭の話」を題名にして彼女をインタビューした。「満洲娘」と「支那娘」の恋愛結婚観とチャイナドレスの流行変化などの内容に触れた。李香蘭はまさに「大陸女性」とくに「満洲娘」という身分で日本の読者に語ることで、異国女性のイメージを伝えた。

要するに、二紙は文章と写真を組み合わせ、李香蘭のイメージ作りに大きな役割を果たしたことが言える。

#### (2) 親善の「中国少女」

二紙の注目を浴びたのはラジオ版新聞欄である。ラジオ版新聞欄はほぼ朝刊で掲載され、夜番組の放送時間と内容およびラジオ局のイベントの内容を報道する。それらのラジオ版新聞欄の報道はどの国の言語で歌うのを明らかにする上で、李香蘭の写真も掲載された。番組の使う用語によって「満映美少女スター」のイメージが「支那娘」に変化するようになった。例えば、「満洲国のスター 満洲の歌日本の歌 李香蘭が独唱 ほか」の報道の中に李香蘭が「夜来香」を「満洲語」で歌うことを表示されたが、翌年に「電波で日支民衆が握手 ほか」の報道で同じ曲を「支那語」で歌うという変化がわかる。そして、「夜来香」、「何日君再来」などの「満洲歌」から「北京の旅情」、「蘇州の夜曲」、「西湖の印象」などの「大陸歌謡」まで、李香蘭のイメージは日本語上手な「満洲娘」から「親善の使節」と時局に応じる「中国娘」まで変わってきた。

#### (3) ステレオタイプとしての女

新聞紙における李香蘭の「満洲スター」と「親善の中国少女」のイメージはスクリーンの中の李香蘭像は補完し合うことによって、日本メディアのステレオタイプが形成された。夜、夢、歌とチャイナドレス少女、あわせて中国大陸特有の異国情緒、帝国の視線下「李香蘭」が象徴的な故郷となった。このロマンチック化された「大陸の新天地」を開拓するという移民侵略の行動に賛美することを通じて、日本国民の感情を煽り、動員の役割を果たした<sup>8</sup>。

一方、「李香蘭」の性別のステレオタイプがメディアによって強化された。

### 4. 国籍の「謎」に関する報道の姿勢と傾向

#### (1) 国籍の問題の報道姿勢

1941年の2月11日に日本の紀元節で、李香蘭の実演が「日劇七回り半事件」によって、読売新聞は李香蘭に対する国籍問題が報道した。「李香蘭は芸名 満洲人でなく佐賀県人」という記事が以下のように掲載された。

某劇場前の“豚尻”“豚娘”問題で大騒ぎを起こさせた満映スター李香蘭は技芸者許可証を受けていないことが判つたので関係者一同、十三日警視庁によばれて油を絞られ、始末書を取られた揚句やつと表町署を通じて技芸証申請を出すことになったが、これによって因らざるも李香蘭は満洲人でなく単に芸名であることが判つた。

李香蘭の本名は山口俊子、大正九年二月うまれの廿二歳、北京でこそ生まれたが、本籍は佐賀県杵島であるもので、係官もこれにはびっくりしたという“成程日本語がうまいわけだ”と。<sup>9</sup>

<sup>7</sup>1941年2月11日の紀元節には、日本劇場（日劇）での『歌ふ李香蘭』に出演し、大盛況となった。大勢のファンが大挙して押し寄せ、日劇の周囲を七周り半もの観客が取り巻いたため、消防車が出動・散水し、群衆を移動させる程の騒動であったと伝えられている。この大パニックがいわゆる「日劇七回り半事件」と呼ばれる。

<sup>8</sup>1939年から1940年まで日本の「満洲移民」のブーム期間で、李香蘭は大陸三部作に出演した。「日本と大陸へ虹の架け橋」と思われる。Watts Cragan「『愛』のはげぐちとしての李香蘭—日本と大陸へ「虹の架け橋」を彩る夢の女王」、Annals of human sciences (20-2), 1999, 411頁。

<sup>9</sup>「李香蘭は芸名 満洲人でなく佐賀県人」読売新聞、夕刊、1941年2月15日。

この二百字ぐらいの記事は夕刊で載せられるし、注目を浴びる版面に置かれてないので、人々の注目を引きつけることができなかつたといえる。そして、四編の関連記事は同じようにすべて夕刊に掲載され、間隔時間が長く、連続性に欠ける。さらに、その関連記事の着目点は李香蘭の国籍問題ではなく、芸人の「演出許可証申請」におかれた。

朝日新聞は李香蘭の身分について報道せずに、従来のように李香蘭を強調的に報道しなくなり、写真も載せないようになった。

以上のような報道姿勢からみると、読売新聞や朝日新聞が李香蘭の国籍に関わる身分問題を真剣に取り上げらず、大衆に広く知らせることをしなかつたと思われる。

## (2) 「健全娯楽」の輿論操作

「日劇七回り半事件」後、朝日新聞が「紀元佳節騒乱」に焦点を当てた。<sup>10</sup> 紀元佳節の大パニック原因を追求する際、当事者としての李香蘭の本当の身分を避けるため、読者投稿を通じて、「一映画女優」、「人気スターの実演」などの表現で表す。また、どういふふうに「道徳観念」に欠ける国民にたいして「健全娯楽」を行うというテーマに導いた。ここに注意を払うべきなのは、朝日新聞と同様に読者投稿の視点を借り、輿論を操作するのが読売新聞なのである。「健全娯楽」がいったい何を意味したか。それに関しては、読売新聞の読者投稿に以下のように指摘している。<sup>11</sup>

かくの如きものは速やかにこれを排し大衆の内へ真に健康な娯楽を持ち込むため大政翼賛会や内閣情報局の一層の努力をのぞむものである。

国策映画ともなればよろしくナチスの「世紀の凱旋」式に行くべし。当局は非常に清新な民族感と流露たる風雅味をもってわれらにピッタリと来る企画による娯楽を指導奨励されて人心をして倦まざらしめんことを祈る。

その上、「健全娯楽」への輿論を導くため、読売新聞は社選の「国民総意の歌」に関する発表会の社告や宣伝記事を連日に掲載した。結局、李香蘭ほかとの提携によって、「二万人の大斉唱」という大盛況を巻き起こした。<sup>12</sup>

## 5. おわりに

1938年10月から1944年まで、「満映」の女優として李香蘭は19作の映画を演じた。以上の考察によると、新聞で作り上げられた李香蘭のイメージと映画中の李香蘭像は総合的に補完し合うような相関関係を持っていることがわかるようになった。また、時局の推移につれて、新聞が作った「李香蘭」のイメージは「北京に生まれた『満洲スター』」から「親善の『中国少女』」までに変化しつつあった。それに、メディアの報道姿勢は映画中の李香蘭像を一層鮮明にする役割を果たした。

そして、「李香蘭」＝夜、夢、歌のチャイナドレス少女というイメージが1941年にはすでにつくりあげられたことがわかる。即ち、中国大陸の美しさが女性としての李香蘭を媒介し、伝えられた。

さらに、活字メディア再生産における「チャイナドレスの他者」というイメージは、日本に親しみを持つ被支配者であるように、日本の領土拡張を合理化する性別のステレオタイプを暗示すると言えよう。

つまり、日中戦争時期日本の活字メディアによって、北京に生まれた「満洲スター」や様々な「中国娘」を演じる女優としての李香蘭は、単に言語／国籍／民族を超える「日、満、華」の大スターではなく、「日、支親善」や「日、満、華親善」という戦時体制国策に協力するため、メディアが作った文化イメージと言ってもよいだろう。そういう意味で、李香蘭の国籍の「謎」は解明されない理由は、日本のメディアが発達していないということよりも、当時の大手メディアが自分から作った李香蘭のイメージを壊したくないということにあるわけなのであろう。

<sup>10</sup> 「節を汚した観客の狂態 堪りかねて署長大喝」朝日新聞、東京／朝刊、1941年2月12日。「観客の狂態をこう観る／国民的訓練の欠如 翼賛会国民生活指導部長の談／為政者の罪 権田氏談／奪うな娯楽を 野上女史談／娯楽求める心 松本博士の談」朝日新聞、東京／夕刊、1941年2月13日。「日大生の訓練観劇」朝日新聞、東京／夕刊、1941年2月14日。「娯楽の反省 佳節の不祥事件をめぐる 巷の声」朝日新聞、東京／夕刊、1941年2月18日。

<sup>11</sup> 「李香蘭と大衆▽卑俗な国策娯楽 読者眼」読売新聞、朝刊、1941年2月16日。

<sup>12</sup> 「国民総意の歌・そうだ、その意気発表会（社告）」「読売新聞社・選 国民総意の歌 西条八十氏が作詞 力の旋律誕生ほか 戦争」読売新聞、朝刊、1941年5月11日。「国民総意「そうだその意気」発表会 妍を競う人気歌手 今夕、後楽園球場で」読売新聞、朝刊、1941年5月13日。「国民総意の歌「そうだその意気」発表会／後楽園球場（社告）」読売新聞、朝刊、1941年5月14日。「沸る銃後の熱 歌う2万人 『そうだその意気』発表会」読売新聞、朝刊、1941年5月15日。